



3歳児のお客さんに「いらっしゃいませ！」



作ったケーキが並べられた台



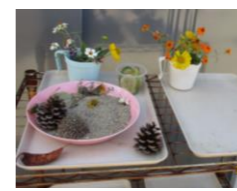
友達の考えを取り入れて、旗を付けてみるB児



「きれい！旗の飾り、付けたら？」



材料が置いてある棚から、必要なものを選びカップに入れるA児



前日の遊びを残している、おしゃれなディスプレイ



砂で作ったケーキ屋さん

協力園

愛光こども園

(幼児の実態)

こども園の3歳から5歳の子どもたちは、みなでお店屋さんごっこをしています。1週間後に開店できるよう、それぞれの店で準備をしていました。店のメニューは異年齢で構成されており、おもちゃや財布、アクセサリー、ハンバーガー、ケーキを作っています。保育者に頼らなくても自分の力で商品を作れるようになった4歳児は、保育者が掲示している商品の写真を見ながら、材料選びをしたり、すてきな商品を作ろうと自分なりにアレンジしたり、年下の友達が困っていると手を貸してあげたりする姿が見られます。

保育室から園庭に出ると、おしゃれなディスプレイをしている棚が目を引きまします。子どもたちが片付けに利用している棚で、前日の遊びが思い起こされるものになっています。棚のトレイの中央に、ピンクの皿があり、砂をプリンカップで型抜きしたものに、松ぼっくりやドングリの帽子、花があしらわれています。皿の横に、小花が活けられたブルーのカップや、輪切りにされた緑のカボスの入った透明なカップ、空いたスペースには、色付いた葉っぱと松ぼっくりが一つずつ置かれています。子どもたちは、まるで作品を展示しているかのように片付けをしていました。

その隣には、保育者が新しく準備した材料の棚があります。秋の自然物である松ぼっくりや、クヌギやコナラなどのドングリとそれに枝や帽子が付いたもの、千日紅、コリウス、カボスの輪切り、赤や黄、白色の小花などが、深さの違う入れ物に入って並べて置かれています。

子どもたちは、保育室のそれぞれのお店屋さんで、遊んだ場を片付けたり明日の遊び方を決めたりして、順次園庭に出て来ています。

4歳児のA児は、園庭に出てくるとすぐに、自分のイメージに見合うものを探しているのか、千日紅を手に取り、花の様子を見てはまた戻っています。どうやら、茎と葉の付いていないものを選び、必要な量だけ使おうとしているようです。保育室でアクセサリー作りをしていたA児は、自分も苦労して作ったのか、やっとビーズを通せた3歳児のことを考えて、紐の端を持ってあげていた子どもです。

また、B児は、自分の作りたいケーキのイメージがあったので、園庭に出て来るとすぐに、ピンクの皿の中央に砂をこんもりと盛り、その砂の間に松ぼっくりや千日紅を並べると、台に置いて自分の作品をじっくり眺めていました。すると、友達が来て、きれい！旗の飾りもあつたよ。ここに付けたら？と、B児に言いました。B児は、友達の言う材料の置いてあるテーブルに行き、縞模様の旗を選び、ケーキを置いた台に戻り、その旗をケーキの中央に立ててみました。B児は、しばらく旗を付けたケーキを見ていましたが、自分のイメージに合わなかったのか旗を取ってしまいました。再度、材料のあるテーブルに行き、プリンカップの容器に砂を入れ、赤い花と松ぼっくりを飾って新しいケーキを作りました。先程の旗を新作ケーキに差し込んで納得した表情です。完成したカップケーキも、ピンクの皿のケーキと同じ台に並べました。

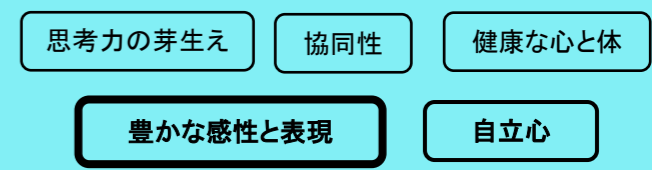
4歳児がそれぞれ、自分で作ったケーキを台に並べていくと、あつという間に台がいっぱいになっていきます。その時A児がやって来て、ケーキを置くと、台には並べるスペースがなくなりました。先生、置くところがなくなつた」と、言いながら保育者のいる所に駆け寄ります。保育者が「これ、使う？」と、材料がなくなつてしまった棚を指さして答えると、A児は、「うん！」と言いつつ、保育者と一緒に棚を運び始めました。

いつの間にか集まっている4歳児の友達が、台のケーキをきれいに並べています。その台の横に、A児と保育者の運んできた棚が置かれると、子どもたちの作ったケーキを並べた台がショーケースで、子どもたちのいるその場所が、ケーキ屋さんになりました。

その時、お店屋さんらしくなつたことに気付いた3歳児がやって来ました。4歳児は、ケーキ屋さんをするために遊び始めたわけではありませんが、ケーキをじっと見ている3歳児に対して、「いらっしゃいませ！どれにしましょうか？」と、ケーキを見せながら話しています。保育室でのお店屋さんが続いて、園庭でのケーキ屋さんの遊びが始まりました。B児は、様子を見に来た保育者に、「お金は、これを使ってください。お釣りもありますよ」と、葉っぱを一枚手渡しました。子どもたちは、店員さんらしい言葉遣いをしたり、遊びに必要なものを身近な物で代用したりして、その場の遊びを楽しそうとしているようです。

子どもたちは、自分で工夫しながら表現をしたり、場に応じた対応を考えたりして、友達との遊びを楽しんでいるようです。今後も、美しいものに出会い、心を動かす経験を重ねて、自分で表現していく嬉しさや、友達と協力して遊ぶ楽しさを味わっていくことを期待します。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「10の姿」



心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

事例から見られる10の育ち

豊かな感性と表現
A児は、自分のイメージに合う材料を選び、必要な量だけ取っている。B児は、よりすてきなものを作ろうと、友達のことを聞き入れ、それを試し、容器や砂の量、飾りの色合いや形などのバランスを考えて、自分の納得するものを作っている。きれいなものに対する感性のようなものは、前日の片付け方からもうかがえる。
環境構成の中に保育者の豊かな感性が反映され、子どもたちは、日頃から美しいものに触れ、イメージを広げたり、深めたりして心の中に豊かに蓄積されているのではないかと考える。自分で工夫ながら作る楽しさを味わい、5歳の終わり頃には、友達同士で認め合い、様々な表現を楽しもうとする姿になってくると思われる。

事例から見られる10の育ち

自立心
子どもたちは、個々の自信作を台に置いていった。A児は、自分のケーキは置けたが、もう置けないことに気付き、並べる場所を増やそうとした。A児の動きからその思いを察知し、友達も動き始めたと考えた。その結果、自分たちで場を整えることになり、ケーキ屋さんのイメージを共有して、遊びを楽しもうとする姿になったのではないかと思われる。
自分で考えて遊びを楽しむ体験や、保育者や友達の力を借りながら、思いを実現する体験を通して、自分の力でやり遂げようとする気持ちが高まっていくようになると思われる。

豊かな感性と表現 保育者の援助・環境構成のポイント

保育者自身が豊かな感性をもち、幼児の心の動きを受け止め、共感する関わり
-いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつことができるような援助
生活の中で様々な形、色、手触りなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しめるようにする。
(子どもがイメージを広げられる様々な素材の準備・子どもが真似したくなるような作品の展示の仕方など)
-感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しめるような環境構成
工夫していることや頑張っていることなど、遊びの中で感じたことを伝え合える場や、自分で材料を選び工夫しながら満足するまで遊べる時間の設定をする。